

《第 41 号》「原発震災のあとにもリニアのゴーサイン」

懸樋哲夫(ガウスネット代表)

10 年ほど前のことアメリカのアーミッシュの村をたずねました。車も電話も電気もない生活ですが、その暮らしぶりは豊かで明るいものです。いただいた昼食は本当にご馳走で、デザートも 3 品も出されました。

日本では 3 月の震災のあと 5 月に国土交通省がリニアモーターカー建設のゴーサインを出しました。時速 500 キロのスピードを出せば大きなエネルギーを要することはどんな先端技術でも不可避というものです。具体的な電力使用量は最後まで伏せられたままでした。

国交省の委員会は、最終答申段階で「東京ー大阪 74 万キロワット」という数値を出しましたが、これも設備容量のための瞬間ピーク電力の数値ではないもので、まやかしです。ここにも電子力の推進と同様の隠蔽体質が横たわっています。

原発が爆発してさえ、エネルギー浪費問題は議論もされないまま建設への結論を出してしまったのです。もはや私たちの暮らしがこれから将来にわたり電力を使いたい放題という時代は来ないことは明らかでしょう。節電の呼びかけもむなしく響きます。

電子力のような大きな発電所で作られた電気を遠くに運ぶ高圧送電線、これについても、発生する電磁場が近隣の居住者に対して健康被害を及ぼしています。小児白血病などを生じさせることが各国で報告されており、日本の調査でも 0.4 マイクロテスラでリスクあります。このことで制限値を作ったのは経済産業省電子力安全保安院で今年 3 月末のことでした。200 マイクロテラスという数値です。甘くてお話にもなりません。原発・リニア・送電線は中身を知らされないまま押し付けられるものという共通の構造の中にあります。

私たちはもうアーミッシュのような生活はできません。それは電気がないと夜が暗い、エアコンがないと暑い夏の昼が過ごせない、と実はそう思い込まされ、そうさせられているのだということなのではないのでしょうか。

以上